第 2 部

基本構想

様々な木々や草花が共生することによって、豊かな森となり、
多くの生命（いのち）を育むように、
いろいろな地域の資源や人々の連携・協働によって、
新たに「まちづくりの森」を育て、
市民一人ひとりがいきいきと暮らし、幸せを実感できるまちをめざします。

第1章　東近江市の将来性

第1節　東近江市の歴史

滋賀県は古くから近江と呼ばれてきましたが、それは「近つ淡海」、つまり琵琶湖を意味していました。

琵琶湖の水運や諸街道の発達によって、人とともに物資が各地から近江を経て都へ運ばれました。また、琵琶湖の漁業や東部に広がる肥沃な大地を中心とした農業など、豊かな資源と生産力は、都に近いという立地もあって近江の発展を支えてきました。そして、大陸からの渡来文化との交流もさかんで、それらを取り入れてつねに先進の文化を培ってきました。さらには、歴史上、交通の要衝であったことから、古代の大津京や戦国時代の安土城が築かれるなど、政治的にも重要な位置にありました。

このように近江は、日本海と瀬戸内海及び東西日本を結ぶ交流の大動脈に位置し、日本の歴史の上で大きな役割を果たしてきました。

東近江市は、こうした歴史をもつ滋賀県のほぼ中央に位置し、鈴鹿山系から琵琶湖に至る愛知川や日野川などの流域に広がり、個性的で多彩な地域文化を培ってきました。

鈴鹿山系の美しい緑を背景として、古刹百済寺や紅葉の名所永源寺、三重石塔で知られる石塔寺などの仏教文化を花開かせるとともに、豊かな森林は全国へと広がっていった木地師発祥の歴史を生みました。そして鈴鹿から流れ出る水は、愛知川や琵琶湖･内湖を舞台とした漁業や水運などの豊かな恵みをもたらすとともに、湖東平野の肥沃な大地をうるおし、米をはじめとする豊かな農産物を育んできました。その経済力を基盤とした守護大名佐々木六角氏を取り巻く戦国ドラマは、近江の近世、ひいては日本の近世を到来させる引き金となりました。また、豊かな生産物は、「市」のにぎわいを支えるとともに、全国へと流通網を開拓した山越商人、近江商人を生み、「三方よし」の商い文化へと結実していきました。

このように、先人たちは、美しい自然と共に生き、恵み豊かな地域文化を築いてきました。そして、今日でも、日本の広域交通の要衝に位置する立地条件を活かして、多くの企業の集積のもと、絶えず次代を見つめる先取の気質を引き継いでいます。

一方では、人と人のつながりを大切にするコミュニティの力を土壌として、特色ある祭りやイベントが開催されています。また、市民協働の力や多様な事業者のネットワークによって、本市を発祥とする菜の花エコプロジェクト、遊林会などの里山保全活動、認知症ケアを通じたコミュニティづくりや、さらには、まちづくり協議会の設立、図書館活動を通じた地域づくりなど、先進的で個性的な取り組みを育ててきた地域です。

第2節　広域的な視点から見た展望

二度の合併を経て誕生した本市は、豊かな自然を背景に、このような多彩な文化が比較的ゆったりとしたのびやかな広がりの中で、地域に溶け込み、いくつもの個性をもって息づいている県下有数の都市です。

名神高速道路や国道8号などの主要幹線道路が走り、JR琵琶湖線とともに京都や大阪、名古屋といった大都市圏をつなぐ国土軸上に位置しています。また、日本海と太平洋を結び、北陸や三重方面とも交

流が広がる位置にあります。

今後は、国道421号の三重方面への道路整備や、名神名阪連絡道路の整備、びわこ京阪奈線（仮称）鉄道建設構想の推進などによって、中部圏をはじめ、周囲の都市圏とのさらなる広域交流の展開が期待される都市です。

第3節　魅力ある都市への可能性

私たちを取り巻く社会潮流においては、少子高齢社会への対応や安全･安心な暮らし、自然と共生する暮らし、心豊かな暮らし、情報通信技術の活用などが求められています。

その中で、本市は、鈴鹿山系から琵琶湖まで水と緑の美しい自然に恵まれており、癒しややすらぎを求める人々のニーズにこたえられる新たな地域文化の可能性をもっています。また、豊かな自然とそこに育まれる産物は、現代の本物志向や健康志向にあった価値を高めていく可能性をもっています。

そして、若者をはじめ、各世代のニーズに対応した都市の核となる中心市街地の形成や、調和のとれた土地利用の推進などによって、利便性の高い市街地とのびのびとした田園が共存し、地域コミュニティの強さや人と人のつながりをかねそなえた、魅力ある都市となる将来性をもっています。

また、今後は、広域幹線道路や情報基盤など社会基盤の整備により、新たな企業の立地や、さらに豊かな交流の展開が期待され、のびのびとした子育て環境を求める若い世代をはじめ、いろいろな世代の人々が住みたくなるような、交流型の定住都市となる可能性をもっています。

紅葉の永源寺